

2023 年度

国 語  
(2 期)

(答はすべて解答用紙に記入すること)

(時 間 50分)

番 号		氏 名	
--------	--	--------	--

清泉女学院中学校

〔一〕 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(字数制限のあるものについては、すべて句読点や記号をふくみます。)

① 日本は経済大国になったといつて、それで日本人の生活がゆたかになったわけではなかった。余裕ができたわけでもない。むしろワーカホリックといわれるくらい働きつづけねばならず、狭い家に住み、満員電車に乗って長距離通勤し、夜遅くまで働かねばならぬ現状は、あなた方も知っているだろう。過労死という言葉さえあるくらいだ。たしかに物はゆたかになった。どの国にも劣らぬくらい市場に物はあふれている。しかし、物の生産がいくらゆたかになっても、それは生活の幸福とは必ずしも結びつかない。幸福な生のためには物とちがう原理が必要であることにわれわれはいまようやく気がつきだしている。

いや、むしろ物にとらわれる、購買、所有、消費、廃棄のサイクルにとらわれているかぎり、内面的な充実は得られないことに気づきだしている。限らない物の生産と浪費が地球上での共存の上から、環境と資源保護のために許されなことを知っている。真のゆたかさ、つまり内面の充実のためには、所有欲の限定、無所有の自由を見直す必要があると感じている。人が幸福に生きるためには一体何が必要で、何が必要でないかと大原則に戻って考え直そうとしている人が大勢出てきている。

日本にはかつて清貧という美しい思想があった。② 所有に対する欲望を最小限に制限することで、逆に内的自由を飛躍させるといふ逆説的な考えがあった。

名利に使はれて、閑かなる暇なく、一生を苦しむるこそ、愚かなれ。財多ければ、身を守るにまどし。害を買ひ、累を招く媒なり。身の後には、金をして北斗をささふとも、人のためにぞわづらはるべき。愚かなる人の目をよるこぼしむる楽しみ、またあぢきなし。大きな車、肥えたる馬、金玉の飾りも、心あらん人は、うたて、愚かなりとぞ見るべき。金は山に棄て、玉は淵に投ぐべし。利に惑ふは、すぐれて愚かなる人なり。

(訳) 名譽や利益といった欲望にとらわれて、心静かにしているひまもなく、一生あくせくと、わが身を苦しめるのはとてもおろかなことだ。財産が多ければ、自分の身を守ることはおろそかになり、また守りにくくなる。それはまた害を受けたり、苦勞をしたりする原因となる。自分の死後、黄金で、北斗七星をささえるほどの財産があっても、それを残された人からは迷惑がられるだろう。愚かな人の目を喜ばせるのも同様につまらないものだ。大きな車や、太った馬や、金や玉の装飾なども、道理をわきまえている人は、まったくばかばかしいものだと思えるに違いない。金

は山に捨て、宝玉は水の中に捨てるのが良い。利欲にとらわれる人は特に愚かである。

〔徒然草〕第三十八段

③ これは十四世紀の吉田兼好という人によって書かれたエッセイの一章ですが、この『徒然草』という本は、以来モンテーニュの『エッセイ』のように日本人に愛読されて来た、日本人の趣味や判断に大きな影響を与えた古典です。ここにある、世俗的な名誉とか地位とか財産とかに心を勞して、静かに生を楽しむ余裕なく、一生をあくせく暮すなどは実に愚かだとする考え方は、その後の江戸時代を通じて、日本人の生き方に大きな影響力を与えて来ました。

兼好はここでは、金儲けのためにしか関心のない人の愚かさを説いている。現代の、住宅だのいいクルマだの、次から次へ開発される製品の所などにとらわれている人の愚かさを言っているのと同じですが、こういう考えがいま新しくわれわれを打つのです。彼はつづけて、地位とか官位とか名声とかを求めることの愚かさを説く。さらに世間の評判を得るため、知識と学問とを誇ることがいかに空しいかを説く。そして最後にこう言っています。

④ まことの人は、智もなく、徳もなく、功もなく、名もなし。誰か知り、誰か伝へん。これ、徳を隠し、愚を守るにはあらず。本より、賢愚・得失の境にをらざればなり。

(訳) 本当に優れた人は、知恵もなく、徳もなく、功もなく、名声もない。本当に優れた人のことを、誰が知っていて、誰が人に教えようか。いや、誰も知らないし、誰も教えない。しかし、これは本当に優れた人が自分の徳を隠し、おろかなように見せているわけではない。本当に優れた人というのは、そもそも、賢いとか、おろかだとか、得したとか、損したという境地にいないのである。

真の人間は利得とか名聞とかそんなのかかわるところにいない、ただ己れの心の充実を求めるのみなのだ、というのです。

このような考え方は、ある意味では、アッシジのあの聖フランシスコの考えに通じると言えましょう。聖フランシスコは神の前に心の充実を求

めたのですが、兼好は神とは言っていないものの、そういう世俗を離れた絶対者の前で恥じぬ生き方こそ賢い人の生き方だと考える点では同じでした。そして大事なことは、十四世紀においてばかりでなく、この『徒然草』に見られる考え方が、品を変え様を変え、いろいろな人によって肯定され、実践され、日本の文芸の基本的な思想として、以後ずっと受け継がれ、生きつづけて来た。文人ばかりでなく名もない生活者も、こういう生き方をよしとし、それが一つの伝統にさえなったということです。

清貧とはたんなる貧乏ではない。それはみずからの思想と意志によって積極的に作りだした簡素な生の形態です。本阿弥光悦やその母妙秀のよ  
うに、もしかれらが欲するならいくらでも贅沢な生を送れたであろうに、かれらはそれをきらい、必要最小限の生を選びました。それはなぜか。アツ  
シジの聖フランシスコが金殿玉楼の生を捨てて無所有の草庵に投じたのは、そういう生き方が神に近いと信じたためであつたように、かれらもま  
た別のルートから同じような結論に達したからでした。

そこにはまず所有のもたらさざる悪影響についての、非常に行きとどいた省察があつたと思われるのです。富貴への願望、所有への欲  
望が盛んであればあるほど、人は財の増大が唯一の徳であるかのような錯覚に陥って、所有の上に所有を欲し、そのためにはいかなる非人間的な  
所業もあえて行うようになります。

ひとたび所有欲にとりつかれると、人は所有の増大にのみ関心を奪われ、金銭の奴隸となつて、それ以外の人間の大事に心が及ばない。家族への  
配慮とか愛とか慈悲とか、人間としての最も大事なことにさえ気が向かわず、富貴な人は必ず慳貪になる、と妙秀が考えていたことは先に言つ  
たとおりです。そればかりでなく、かれらは物の取得や保全に心を奪われて、みずからの精神の自由をさえ失っている、と光悦は考えていました。  
だから彼は最上の茶器でさえも、「やれ落すな、やれ失くすな」と気を奪われるのがうるさいと、すべて人に与えてしまったくらいです。

所有を必要最小限にすることが精神の活動を自由にする、所有に心を奪われていては人間的な心の動きが阻害される、ということにかれらはい  
ち早く気づいていたのだと思います。

(中野孝次『清貧の思想』より一部改変。なお『徒然草』の訳は本校国語科による。)

- ※1 ワーカホリック：生活の糧を得る手段であるはずの職業に、私生活の多くを犠牲にして打ち込んでいる状態。
- ※2 モンテーニュ（一五三三年～一五九二年）：フランスの思想家。独断に陥らず、寛容な精神こそが人間には必要だと説いた。
- ※3 聖フランシスコ（一一八一年～一二二六年）：イタリア、アッシジで活躍したカトリックの修道士。清貧を説いた。
- ※4 本阿弥光悦（一一五八年～一六三七年）：桃山時代から江戸初期の芸術家。書・陶芸・漆芸などにすぐれた。
- ※5 慳貪：けちで、欲が深いこと。また無慈悲で思いやりがないこと。

問一 ———線①「日本は経済大国になったといつて、それで日本人の生活がゆたかになったわけではなかった」とありますが、筆者がそのように考えるのはなぜですか。筆者の考える理由としてふさわしくないものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア どんなに生活レベルが向上しても、精神的な余裕をあまり持つことができなかつたから。
- イ どんなに豊かになつても、休日や深夜まで働き続け、過労死してしまう人が存在するから。
- ウ どんなに働いても、狭い家に住んだり、満員電車で長距離通勤したりする人がいるから。
- エ どんなに市場に物があふれても、それらすべてを自分のものにするなどできないから。
- オ どんなに物の生産が豊かになつても、生活の幸福とは必ずしも結びつかないから。

問二——線②「所有に対する欲望を最小限に制限することで、逆に内的自由を飛躍ひやくさせるという逆説的な考えがあった」とありますが、どういうことですか。その説明としてもっともふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア「物を持たない」ことは「豊かになる」ということと一見矛盾むじだんするが、むしろ地位や財産を追い求める労苦から解放されて、心の充実を得ることができるといふこと。

イ「心の豊かさ」は、お金や物をたくさん手に入れたいという所有欲を捨て、むしろ欲望を我慢がまんすることによって、初めて手に入れることができるものだという事。

ウ「精神的な強さ」を手に入れるには、自分の欲望のままに行動するのではなく、むしろ本能を抑制よくせいすることによって、初めて手に入れることができるものだという事。

エ「物質的な豊かさ」と「心の豊かさ」は密接な関係にあるように見えるが、むしろ二つを同時に手に入れることはできず、どちらか一つはあきらめなくてはいけないものだという事。

オ「所有を最小限にする」ことは「心の豊かさ」と一見相反するが、むしろ物に束縛そくばくされない生活をする事によって、考える自由を手に入れることができるということ。

問三——線③「これは十四世紀の吉田兼好よしだけんこうという人によって書かれたエッセイの一章です」とありますが、次の問いに答えなさい。

(1) 『徒然草』は何時代に書かれた作品ですか。もっともふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 奈良時代    イ 平安時代    ウ 鎌倉時代    エ 安土桃山時代    オ 江戸時代

(2) 『徒然草』よりも後に書かれた作品はどれですか。もっともふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 万葉集    イ 源氏物語    ウ 竹取物語    エ 古事記    オ おくのほそ道

(3) 吉田兼好のエッセイの内容として、ふさわしくないものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 名誉や利益といった欲望にとらわれ、一生あくせくと、自分自身を苦しめるのはとてもおろかなことである。
- イ 財産が多いと、自分を守ることがおろそかになり、また守りにくくなるため、害を受けたり、苦勞をしたりする原因となる。
- ウ 自分の死後、黄金で、北斗七星をささえるほどの財産があると、それを残された人からはありがたがられるだろう。
- エ 大きな車や、太った馬や、金や玉の装飾などを、物事の分別が付く人は、まったくばかばかしいものだと見るに違いない。
- オ 私利私欲にとらわれている人は特別におろかで、自分の財産はむしろ捨てるくらいの方が良い。

問四 — 線④「まことの人」とありますが、兼好法師の考える「まことの人」とはどんな人物ですか。本文からうかがえるその説明としてもつともふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 知恵もなく、徳もなく、功もなく、名声もないありふれた人物。
- イ 誰もが認知することのできないくらい、目立たない人物。
- ウ 周囲の人が実力を計り知れないくらい、優れた才能を持った人物。
- エ 自分の徳を隠し、周囲にあたかも愚かなように見せている人物。
- オ 利得や周囲の評価など関係なく、ただ自分自身の心の充実を求めた人物。

問五 — 線⑤「かれらもまた別のルートから同じような結論に達した」について次の問いに答えなさい。

- (1) かれらの「結論」とはどのようなことですか。もつともふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。
- ア 周囲からの評価を高めるために、貧しい人々にものを分け与えるということ。
- イ 自らの精神の自由さを保つために、様々なものへの所有欲や執着を捨てること。
- ウ 神仏と同じ境地になるために、豪華絢爛なものを捨て、わびしい生活を送るということ。
- エ ありとあらゆる悪い影響を生じさせないために、自分自身の欲望を我慢するということ。
- オ 家族や周囲への愛を失わないようにするために、富貴への願望や所有への欲望を持つこと。

(2) 「かれら」にとって「清貧」とはどのようなものであると筆者は考えていますか。本文から三十字でぬき出し、最初と最後の三字を答えなさい。

問六 — 線⑥「金銭の奴隷」とありますが、どういうことですか。その説明としてもっともふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 自らの生活をすばらしいものにするために、たくさんお金を使い、多くの使用人を雇ってしまおうということ。

イ 富を手に入れることに行動が支配されてしまい、人間のあるべき姿ではなくなってしまうということ。

ウ 自らの理性を保つために、お金をたくさん使わざるをえない状況になってしまおうということ。

エ 周囲の人々から愛されるためには、多くの富を手に入れなければならなくなってしまうということ。

オ 財産を増やすことに心が奪われて、家族や友人など他の誰のことも愛せなくなってしまうということ。

問七 「兼好」、「聖フランシスコ」、「光悦」の三人の生き方から、筆者はどのようなことを伝えたいと考えられますか。「所有」の問題点に触れて、一〇〇字以内で説明しなさい。

問八 線「日本にはかつて清貧という美しい思想があった」とあります。次の表やグラフは現代の「日本人の感性（美意識）」について、国土交通省が調査し、まとめたものです。後の問いに答えなさい。



(1) 『国土交通白書』では「高度経済成長長期以後の日本人の感性（美意識）」について、以下のように述べています。

図表1 ごみ（一般廃棄物）の総排出量の推移

年	ごみの排出量(単位は万トン)
1955	621
1960	891
1965	1,625
1970	2,810
1975	4,217
1980	4,394

資料)環境省「日本の廃棄物処理」より国土交通省作成

1955年頃から1973年まで、急速な経済成長を遂げたこの時期は、社会生活が大きく変容し、日本人が持つ感性（美意識）にも多大な影響を及ぼしたと考えられる。

高度経済成長長期は、欧米に「追いつけ、追い越せ」の精神により、経済性や機能性を重視し、人々はデザイン等個性にこだわらず、大量に生産された画一的な物を消費していた。A ことはいいことだという言葉に象徴されるように、人々は、より大きな物をたくさん所有し、また、次々と買い替えていくという「物質的な豊かさ」を追求していたと考えられる。

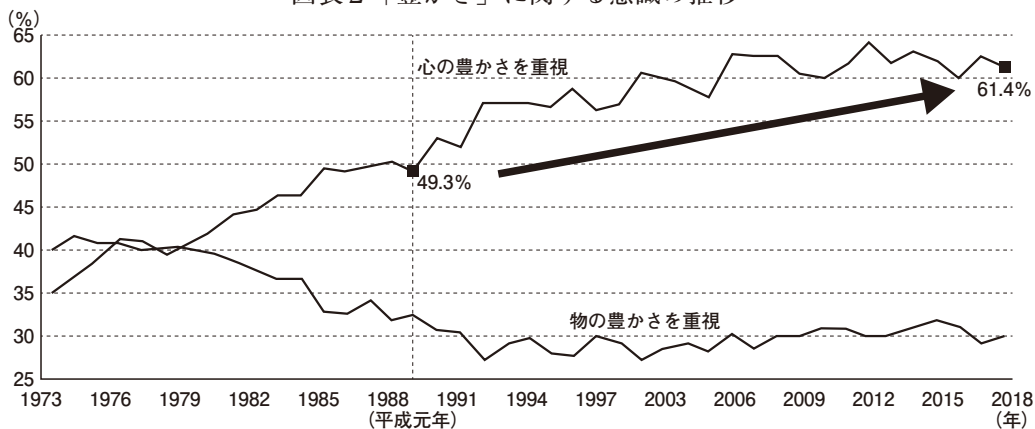
また、この時期の経済発展により、公害等の環境問題が発生した。急速な工業化の過程で、自然が破壊され、工場から排出される有毒廃棄物等は、周辺住民に健康被害をもたらした。また、大量生産・大量消費の経済構造が進み、ごみが急速に増え、その総排出量は、高度経済成長期の当初（1955年）からの20年間で約B 倍に増加した。

（令和元年版『国土交通白書』より一部改変）

問題

- A、  
Bに入る語句として、ふさわしいものを次の中から一つずつ選び、記号で答えなさい。
- A 美しい  
B 大きい  
C 安い  
D 楽しい  
E 明るい  
F 壊れる  
G 汚れる  
H 減る  
I 増える  
J 変わらない

図表2 「豊かさ」に関する意識の推移



資料) 内閣府「国民生活に関する世論調査」より国土交通省作成

(2) 続いて「平成の日本人の感性(美意識)の特徴」について、以下のように述べています。

内閣府の「国民生活に関する世論調査」では、これからの生き方として、「まだまだ物質的な面で生活を豊かにすることに重きをおきたい」(以下「物の豊かさ」という。)、 「物質的にある程度豊かになったので、これからは心の豊かさやゆとりのある生活することに重きをおきたい」(以下「心の豊かさ」という。 )の、いずれの考え方に近いかを尋ねている。この調査の結果を見ると、**C**に、「物の豊かさ」と「心の豊かさ」は均衡し、以後、平成において、「一貫して」「心の豊かさ」を重視した生き方を望む人が多いことが見受けられる。

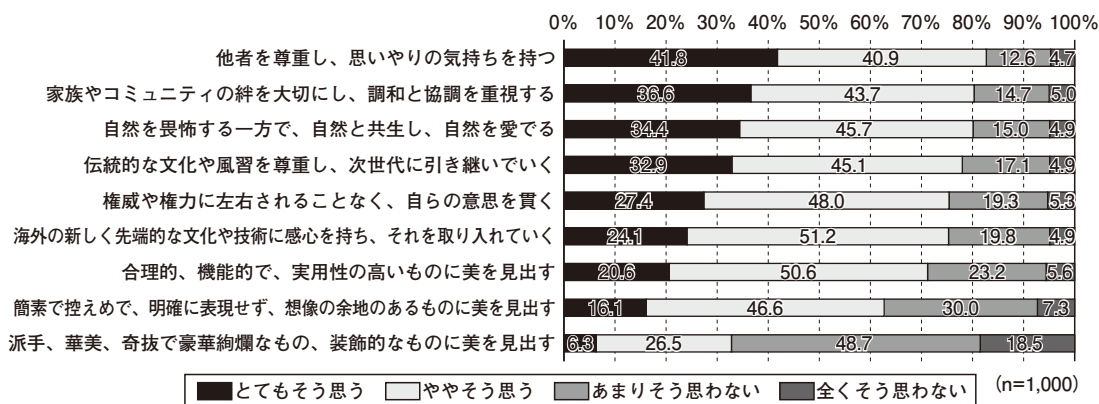
(令和元年版『国土交通白書』より一部改変)

問題 **C** に入る語句として、もっともふさわしいものを次のI群の中から一つ選び、記号で答えなさい。また、この時期の出来事で、日本人の意識の変化をもたらしたと考えられる出来事をII群の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- |     |            |            |            |
|-----|------------|------------|------------|
| I群  | ア 一九七〇年代前半 | イ 一九七〇年代後半 | ウ 一九八〇年代前半 |
| II群 | ア 太平洋戦争    | イ 東京オリンピック | ウ オイルショック  |
| エ   | 一九八〇年代後半   | オ 一九九〇年代前半 |            |
| エ   | 沖縄返還       | オ 東日本大震災   |            |

(3) 図表3では「今後重視されるべき感性(美意識)」についての調査をまとめている。このグラフから読み取れるものとして、ふさわしいものを二つ選び、記号で答えなさい。  
 ア「他者を尊重し、思いやりの気持ちを持つ」ことを八割以上の人が重視している。

図表3 今後重視されるべき感性(美意識)



資料) 国土交通省「国民意識調査」

- (4) 「今後重視されるべき感性(美意識)」を持った人が増えている結果、どのようなことが起きていると考えられますか。その説明としてふさわしくないものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。
- イ 「伝統的な文化や風習を尊重し、次世代に引き継いでいく」ことは時代遅れで、改めていくべきだと考える人が多い。
  - ウ 「合理的、機能的で、実用性の高いものに美を見出す」ことを重視する人は半分より少ない。
  - エ 「権威や権力に左右されることがなく、自らの意思を貫く」べきだと約七十五%の人が考えている。
  - オ 「簡素で控えめで、明確に表現せず、想像の余地のあるものに美を見出す」ことは良くないものであると七割以上の人が考えている。
  - カ 「派手、華美、奇抜で豪華絢爛なもの、装飾的なものに美を見出す」ことを重視する人は、軽視している人より多い。
  - イ 「今後重視されるべき感性(美意識)」を持った人が増えている結果、どのようなことが起きていると考えられますか。その説明としてふさわしくないものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。
  - ア プラスチックゴミを削減するために、くり返し使用可能なマイバックやマイ箸、マイボトルを持参する人が増えている。
  - イ 社会に貢献できることを「付加価値」として考える人が増加していて、環境にやさしいものを購入する人が増えている。
  - ウ 情報技術の発展により、それまで見えなかった個人の所有物に関する情報がリアルタイムに共有されるようになり、モノを所有するのではなく、みんなで作おうとする取り組みが増えている。
  - エ 常に技術革新をしていくためには、古くなったものはすぐに廃棄する必要がある、安くて大量購入が可能な使い捨て製品を使う人が増えている。
  - オ 環境への負荷軽減や、開発途上国支援などにつながることを目指して、適正価格で取引をするフェアトレードが盛んになっている。

〔二〕 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(字数制限のあるものについては、すべて句読点や記号をふくみます。)

その翌日、楓は朝のジョギングの途中で神社に寄ることにした。

お盆休み<sup>ぼん</sup>みだけけど、国枝さんは来ているはず。あの人は里帰りする年じゃない、むしろ来てもらう方だ。だから今日も練習しているにちがいない、といささか失礼な予想を立てたのだ。<sup>①</sup>

道場に到着してペースを落とし、クールダウンしながら境内を歩いていると、奥の方からスパンと小気味よい音が聞こえてきた。やっぱり、国枝さん、来ているんだ。

楓は奥の弓道場まで小走りで行った。射場には、国枝がひとりだけで立っていた。国枝はちょうど弓を引き終わったところのようで、矢を取りに行くために跪坐<sup>※1</sup>をしてカケを外そうとしていた。<sup>※2</sup> そんな時でもぴんと背筋が伸びている。

ああ、こういう何気ない姿勢も決まってるな。長くやっている人はそうなのかしら。

楓が足を止めて見惚れていると、国枝が気がついてにっこり笑った。

「おはよう。また来たんだね」

「はい。いまはお盆休みで、ご指導もお休みなんです」

「では、また一緒にやりますか？」

「ご迷惑でなければ、ご一緒させてください<sup>②</sup>」

思わず敬語になった。くだけた言い方では失礼になる、そう思わせるようなたたずまいが国枝にはあった。

「迷惑なんてとんでもない。また一緒に引けるのは嬉しいです。今日は弓道着は持って来いますか？」

「はい。リュックに入れました」

「じゃあ、弓に弦を張ったら、着替えてください」

「先に弦を張るんですか？」

「そうですよ。弓はしばらく置いた方が落ち着きますから」

「わかりました」

言われた通りに弦を張り、更衣室で胴着に着替えていると、射場から声が聞こえてきた。国枝が誰かと話をしているようだ。嫌だな。またあの厳しそうな笠原さんが来てるのかな。

着替えを終えると、楓はおそろのおそろ射場の方に出ていく。

「それで、あなたは私に何をしてほしいのですか？」

国枝の声がはっきり聞こえてきた。

「僕の射を見てほしいんです」

相手の声には聞き覚えがある。乙矢だ。声の調子が切迫している。楓はまずいところに居合わせてしまった、と思った。更衣室に戻って隠れているか、と迷ったが、それより先に乙矢の視線が楓をとらえた。乙矢の目が X で見開かれた。

「なんで、きみがここに？」

乙矢の声は裏返っている。楓が答えあぐねていると、国枝が代わって返事をした。

「ジョギングでここを通りかかったので、私がいっしょにやろうと誘ったんだよ。この子は無段だけど、うちの弓道会に所属しているっていうから」

「そうだったんですね」

納得したような、していないような返事だった。それどころではない、という切羽詰まった雰囲気<sup>II世っぽ</sup>を乙矢はまもっていた。

「では、僕の方も見てもらえますか？」

「いいですよ。あなたも着替えていらっしやい」

それで、乙矢は自分の使っている弓を取り出して弦を張ると、更衣室へと向かった。

国枝は乙矢のことなど気にしていない様子で、楓に話し掛ける。

「じゃあ、巻藁<sup>まきわら</sup>をやってみましようか？」

「はい」

そして、巻藁の前で国枝の指導を受けていると、着替えを終わった乙矢が出て来た。

「せっかく三人いるんだから、審査の動きでやりましょう」<sup>③</sup>

乙矢は少し驚いたようだったが、「はい」とうなずいた。

「立ち位置はどうしましょう？」

乙矢が尋ねる。

「あなたに大前をやってもらって、私が落ちでもいいですか？」

「はい」

乙矢が同意した。楓は真ん中に立つ。大前のタイミングに合わせればいいので、真ん中は気楽だ。日頃の練習でも、いちばん経験の浅い人間が真ん中に、いちばん格上の人間が落ち、つまりいちばん後ろを務めることが多い。

そして、射場の隅に三人で立つ。乙矢の背中が目の前にある。背筋がびんと伸びて、きれいな立ち姿だ。お辞儀をして入場をする。乙矢は楓より背が高いので、その分歩幅も広い。楓はいつもより少し速いテンポで歩く。楓はまだ袴の扱いに慣れていないので、座ったり立ったりするタイミングが少し遅れ気味だ。そして、坐の姿勢を取ると、後ろから立っている乙矢を見る。乙矢の身体には力がみなぎっている。その目は楓の位置からは見えないが、きつと視線は怖いほど鋭く、的をにらんでいるのだろう。いつもそうであるように。

乙矢の射は力強く、一直線の的に中つた。続く楓の射は三時の方向に矢が逸れた。国枝は力みなく真ん中に中てる。二射目も同様に、乙矢と国枝は的中で、楓だけ大きく外した。

退場して矢取りをして戻って来ると、乙矢が待ち構えたように国枝に尋ねた。

「どうでしたか？」

はやる乙矢を、まあまあ、というように国枝は制した。

「私より先に、このお嬢さんに感想を聞いてみましょう。この前、ふたりでやった時と比べて、どうでしたか？」

「あの時はふたりだったし、立ち順も違うので、単純な比較は難しいんですけど」

いきなり話を振られて、楓は少し口ごもった。何と言えど、乙矢のことをうまく表現できるだろう。

「今回は、二番目だったので、大前に合わせなきゃ、ということを考えて、ちょっと焦りました。歩幅が違うので、早く歩かなきゃいけないし。前は自分が大前だったので、自分のペースでできたんですが」

乙矢の顔がさっと曇った。何か自分はまずいことを言っただろうか、と楓は思う。

⑤「乙矢くんの射についてはどう思いましたか？」

「カッコよかったです。的を絶対外さない、という気迫を感じました」

楓は乙矢をフォローしたつもりだったが、乙矢の顔はさらに歪んだ。逆効果だったようだ。

「わかりましたね。このお嬢さんが、あなたの射の欠点をみごとに見抜いている」

「はい」

⑥乙矢が力なくうなだれる。楓には、訳がわからない。

「あなたは何をそんなに焦っているのですか？ それ射に表れている」

「焦っている……？」

「審査当日の射を見てないので、これはあくまで私の考えですが」

国枝は優しい目で乙矢を見ながら、一語一語言葉を選ぶようにゆっくり語った。

「あなたの射型はきれいだし、的の中もする。三段なら合格にしてもよかったかもしれない。だけど、若い方には正しい射を身に付けてほしい、という思いが我々先人にはあるんです。だから、あえて厳しくみる、そういうことだったのかもしれませんが」

国枝の言葉を噛みしめるように、乙矢は視線を下に向けている。

「問われているのは技術ではなく、弓に向かう姿勢ではないでしょうか」

「弓に向かう姿勢……」

乙矢は深い溜め息を吐いた。

「ありがとうございます。もっと精進いたします」

精進なんて古い言葉、よく使えるなあ、と楓は感心して聞いている。

⑦ 乙矢は弓と矢をしまい、「ありがとうございます」と弓道着のまま出て行った。その顔は暗く、もやもやしたものを胸に抱えているようだった。乙矢の姿が見えなくなると、楓は国枝に聞いた。

「私、何か乙矢くんについて、まずいことを言ったのでしょうか？ 乙矢くんの射、とてもいいと思ってるんですけど」  
それを聞いて、国枝は微笑んだ。

「いえ、正直に話してくれて、乙矢くんも感謝してると思いますよ」

「だけど……」

自分の言葉を聞いて、乙矢はショックを受けたようだ。乙矢を貶めるようなことを口にしてしまったのではないだろうか、と楓は気にしている。楓の想いを察したのか、国枝は優しい目をしたまま説明した。

「そろって弓を引く場合には大前のタイミングにみんなが合わせるものですが、一方で大前こそ続く人たちのことを把握しておかなければならない。双方がお互いのことを意識しあって、初めて三人が一体となるんです。あなたが焦った、ということは、大前があなたの歩く速度を考慮していなかった、あなたのことが見えてなかった、ということなんです」

確かに、国枝とやった時のような安心感、一緒に弓を引いている、という充実した気持ちはなかった。乙矢に遅れまい、とするだけで精一杯だった。

「それに、射をする時には『中ててやろう』という意識を剥き出しにはいけません。そういう姿勢は Y とされているんです」

「なぜですか？」

楓の言葉に、国枝は再び微笑んだ。

「教本通りの答えて言うなら、的に囚われているのは美しくない、ということになります」

「教本ですか」

弓道会に入会した時、『弓道教本』があることを教えられた。全日本弓道連盟が作った、弓道の教科書のようなものだ。第一巻の射法篇というものをご購入するようと言われ、母に頼んでネットで購入してもらった。だけど、写真が古めかしく、言葉も難しいので、楓はばらばらめくるだけで、ちゃんと読んではない。



「教本通りじゃないとダメなんですね」

「ええ。ですが、ただ教本に書かれているのを鵜呑みにして、それを形だけ真似するというのも、よくないことだと私は思います。教本は道しるべではありますが、なぜそうなるのか、自分の射がどういうものかは、毎日修練して自分でみつけねばならない。畢竟それが弓を引くことの意味だと私は思っています」

「よく……わかりません」

だとしたら、別に乙矢が悪いわけではない、ということにならないだろうか。

「わからなくてもいいのです。いまわからなくても、いつかわかる時が来るかもしれない」

「ずっとわからないこともあるんですか？」

楓が聞くと、逆に国枝が問い返す。

「それは嫌ですか？」

「ええ」

楓がきつぱりと返事すると、国枝は破顔一笑した。

「わからないことの答えを探し続けることも、大事なことですよ。何もかも、簡単に答えがわかったら、つまらないじゃないですか」

そうかなあ。口には出さないが、楓は心の中で思っている。わからないことがすぐに解決する方がすっきりするのに。

「ともかく、乙矢くんの問題は乙矢くん自身で解決しなければなりません。私たちができることは、ただ見守ることくらいです」

見守ること。確かに、それくらいしか自分にできることはない。それほど親しくもないし、乙矢より弓道が下手な自分は、相談相手にもならないだろう。

「さあ、もう少し引きましよう。今度は立射で」

そう国枝に促されて、楓は矢を持ち直し、射場の定位置へと歩いて行った。

※1 跪坐…爪立って膝頭を床に付け腰を下ろした姿勢のこと。

※2 カケ…右手にはめる鹿皮の手袋のこと。

※3 畢竟…結局。

問一 ――線Ⅰ「小気味よい」・線Ⅱ「切羽詰まった」の言葉の意味としてもっともふさわしいものはどれですか。次の中から一つずつ選び、記号で答えなさい。

ア 明るい

イ かん高い

Ⅰ「小気味よい」ウ 激しい

エ 大きい

オ 気持ちのよい

ア 我を忘れた

イ とても緊張した

Ⅱ「切羽詰まった」ウ 責め立てられた

エ 追いつめられた

オ そわそわした

問二 ――線①「失礼な予想」とありますが、どのような点が失礼だと楓は考えていますか。もっともふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 国枝さんは帰省するような年齢ではなく、お盆でも弓道場に来ていると、楓が勝手に考えている点。

イ 国枝さんは弓道に夢中で、お盆休みであっても弓道場で練習しているはずだと、楓が勝手に想像している点。

ウ 国枝さんは家族と仲が悪く、休みでも家族に会わず神社に来ていると、楓が勝手に同情している点。

エ 国枝さんは弓道場にしか行く場所がなく、お盆でも弓を教えてもらえると、楓が勝手に期待している点。

オ 国枝さんには友達がおらず、誰にも会わずにすむ神社に一人で来ていると、楓が勝手に決めつけている点。

問三 — 線②「思わず敬語になった」とありますが、なぜですか。もっともふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 国枝さんの弓への姿勢や楓に対して丁寧(ていねい)に話す態度を見て、おごそかさを感じ、敬語を使わないと無礼になると思ったから。
- イ 国枝さんの弓を射る姿勢や道具をあつかう姿勢を見て、厳しさを感じ、敬語を使って尊敬しなければしかられると思ったから。
- ウ 国枝さんの落ち着いた話し方や楓への優しい態度を見て、親切さを感じ、敬語を使わないと生意気な態度になると思ったから。
- エ 国枝さんの弓の道具をあつかう仕草や姿勢を見て、熱心さを感じ、敬語を使って自分の熱意を伝えようと思ったから。
- オ 国枝さんの弓の技術の高さや弓を射る時の力強さと気迫を感じ、敬語を使わなければ失礼になると思ったから。

問四 Xに入る言葉としてもっともふさわしいものはどれですか。次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 恐れおそれ
- イ 喜び
- ウ 驚き
- エ 怒りいか
- オ 悲しみ

問五 — 線③「審査(しんさ)の動きでやりましょう」とありますが、三人が的に対してどのように立つことになりますか。次の図の中からふさわしいものを一つ選び、記号で答えなさい。なお、全員矢を右手で引くものとします。

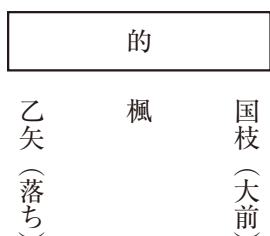
ア



イ



ウ



エ



問六 ———線④「きつと視線は怖いほど鋭く、的をにらんでいるのだろう。いつもそうであるように」について答えなさい。

(1) ここでは語順を通常とは入れ換えて強調しています。この表現技法を何といいますか。もつともふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 比喩                   イ 体言止め                   ウ 対句法                   エ 擬人法                   オ 倒置法

(2) ここで強調されているものとして、もつともふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 矢が的に当たらないことへの乙矢の怒り

イ 乙矢の気持ちを読み取っている楓の感受性

ウ 全員が矢を的に当てようとする射場の緊張

エ 矢を的に当てることへの乙矢の執念

オ 矢を外してはいけなと思う楓の恐怖心

問七 ———線⑤「乙矢くんの射」と対照的な射の様子をあらわしている一文はどれですか。始めと終わりの三字をぬき出して答えなさい。

問八 ———線⑥「乙矢が力なくうなだれる」とありますが、この時の乙矢の気持ちとしてもつともふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 楓のことに気配りせず、ただ的を射ることに必死になっていたことを指摘され、意気消沈している。

イ カッコよかった、とほめてくれた楓に対して、謙遜し、恥ずかしくしていたたまれないでいる。

ウ 的を絶対に外さないという焦りが見透かされずすんだということに、ほつとしている。

エ 楓に自分の射の欠点を見抜かれていたことになる、という国枝の言葉に呆気にとられている。

オ 国枝や楓に良いところを見せようと思っていたのに上手くいかず、落ち込んでいる。

問九 — 線⑦「乙矢は弓と矢をしまい、「ありがとうございます」と弓道着のまま出て行った」とありますが、この時の乙矢の気持ちとしてもつともふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 国枝だけでなく、弓道経験の浅い楓からも自分の欠点を指摘され、くやしい気持ち。
- イ 自分であれば合格できるだろうと、甘く見ていたことを見抜かれて、腹立たしい気持ち。
- ウ 国枝から助言をもらえたが、実際にどのようなようにしたらよいか分からずとまどう気持ち。
- エ 国枝にほめてもらえると期待していたが、期待していた言葉がもらえず落ち込む気持ち。
- オ 国枝や楓から言われたことが理解できず、自分に自信をなくして悲しい気持ち。

問十

**Y** に入る言葉としてもつともふさわしいものはどれですか。次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア つまらない
- イ 正しくない
- ウ 醜みにくい
- エ 小さい
- オ いじらしい

問十一

— 線⑧「破顔一笑」について答えなさい。

- (1) ここでの意味として、もつともふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。
- ア 自分の気持ちを隠さずはっきりとあらわす楓に対して、にっこり笑う。
  - イ 分からないことは嫌だとわがままを言う楓に対して、面白くと笑う。
  - ウ 嫌なことを嫌だと言う楓に対して、笑ってはいけないと思いつつ笑いながら笑う。
  - エ 国枝の言うことを否定する楓に対して、しかたがない子だと苦笑いする。
  - オ 自分の気持ちを隠さずに言う楓に対して、ばれないようにかみ殺して笑う。

(2) 「破顔一笑」と同じように漢数字を使った四字熟語があります。次のア～エの  に入る数字の合計を例にならって算用数字で答えなさい。

例： 千 差万別 八 方美人 答：1008

ア 十人 色      イ 一日 秋      ウ 一石 鳥      エ 寒四温

問十二 — 線⑨ 「乙矢くんの問題は乙矢くん自身で解決しなければなりません」とありますが、乙矢の問題を解決するためには、どのようにすべきだと国枝は言っていますか。六〇字以内で説明しなさい。

問十三 この文章から読み取れる楓の人物像として、もっともふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 切迫した雰囲気になったり、厳しそうな人の前に立ったりすると、不安で落ち着きを失ってしまう人物。

イ 人の顔色が変わったことに気がつくこと、発言がまずかったのではと自分の言動を常に後悔する人物。

ウ 国枝さんに質問されると率直に答えるなど、何事も自分の意思で積極的に発言し、行動する人物。

エ 国枝さんから話を振られると口ごもってしまうなど、目上の人の前ではいい子になろうとする人物。

オ 国枝さんからの助言や問いかけを素直に受け止め、自分なりに誠意を持って考えようとする人物。

〔三〕

次の――線について、カタカナは漢字に、漢字はひらがなに、それぞれ改めなさい。

- ① ガイカに両替する。
- ② オウチヨウ時代の建築。
- ③ ケントウはずれの解答。
- ④ 本のヘンシユウに取りかかる。
- ⑤ 事故を未然にフセぐ。
- ⑥ その言い方は角が立つ。
- ⑦ 鬼の形相で相手をにらみつける。

